寄稿

延岡高校の絆

在校生の「先輩訪問」を受け入れて―

昭和37年卒　黒木　重昭さん

昨年12月9日（火）。東京の空はよく晴れていたが、真冬のような寒気に見舞われていた。延岡高校2年生243人。修学旅行の興奮を機体に詰め込んで宮崎からの便は羽田に到着し、バスに分乗。短い午後のスケジュールを終えたあと、軽井沢に向けて出発しやすい、上野公園のモータープールに車輪を休めた。生徒たちは出発前から決められた30班ごとに、慣れない東京の交通に不安感じながらも、元気に上野駅から都内各所に散って行った。行き先はまた一度も顔を合わせることもない延岡高校の先輩が働く職場。果たしてどのような人が生徒たちを待ち受けているのだろうか。

黒木重昭さんの職場を訪問して記念撮影（写真は過年度卒業生の分を含みます）

訪ねる先輩は26企業・団体の28人

延岡高校の修学旅行の目玉企画ともいえる「先輩訪問」は、今年で4回目となりかしずつ定着し始めている。何より全国の高校でこれほどしっかり、先輩と現役生徒とが交流し、先輩の体験を現役生の進路選択の指針に役立てようという試みはどこにも見当たらない。

今回、生徒たちが訪ねる先輩の働く企業・団体・教育機関などは26。生徒と接する先輩の数は28人であった。（企業名を耳にすると誰でも知っている超有名企業もちろんあるが、聞きなれない、先輩自身が起業したベンチャーもある。

しかし、共通して言えることは迎える先輩が等しく母校を愛し、後輩たちに何か力を貸したいという熱い思いを持っていることである。延岡で育ってきた高校生にとって最も身近な企業といえば、たとえば旭化成などであろうが、延岡で感じている化学産業としての旭化成とは少し趣を変えて、旭化成ホームズとかアサヒ飲料などに勧める先輩が、一味違った旭化成を語って聞かせるという工夫も凝らした延岡高校同窓会の東京総会・パーティー（東京延友会）で、当時の佐藤則夫校長が、生徒のキャリア教育を熱心に考えておられることを知った東京同窓会では、なにか役に立つことはできないだろうかと、次の修学旅行の機会を生かすように検討が始まりである。

先輩を探す作業は春先から

この先輩訪問は2011（平成23）年に初めてスタートを切った。その前年の秋に行われる先輩を確保することも難しく、わずか8人の先輩が限られた生徒を受け入れることにとどまった。だが、その小さな一歩は次の年に11人の先輩が協力してくれることにつながる。そしてその次には25人の先輩が参加。

3回目にして初めて生徒全員が東京で活躍する先輩と交流することができたのであった。石の上にも三年というが、よやく定着できるのではないかという感触を得た3年である。

今回は試金石の4回目を迎える。ところが、なにより先輩たちは各組織の中で毎日を必死で戦っている人が多い。昨年は協力できたのだが、今年のスケジュールではどうしても都合がつかないという人も出てくる。新年度が始まってすぐに12月の修学旅行の日程を確かめて先輩探しを始めるのだが、今回も前年協力した先輩の半数が、都合がつかず脱落という状況に陥った。

密に接を務める者としては頭の中は真っ白になる。しかし、ここで諦めるとせっかくついてきたこのミッションが途切れてしまう。東京延友会のホームページに掲載する。フェイスブックを使って呼びかける。などにより、人を頼って細い糸口から協力してくれる先輩を探し出すという地道な活動を続けるうちに、一人また一人と呼応してくれる人が見つかってくるのである。手を挙げてくれた人には必ず顔を合わせて意図を伝え、生徒の受け入れ方などを説明することも欠かしてはならない大事な手続きだ。

うれしかったのは延岡高卒業Kさんが、フェイスブックを読んで、何かできないかろうかと、とコンタクトしてきてくれたことであった。高校でつながるのではないのだ、延岡という街なのだということを痛感して、またここでふるさとというものを認識することとなった。

初めて協力してくれた先輩は11人、打ち合わせも綿密に

今回は、初めて「先輩訪問」に協力すると言ってくれた人が11人になる。彼らの熱い思いについては心配いらないが、生徒の受け方をどうするのか、話の内容はどんなテーマがいいのか、訪ねてくる後輩たちはどのようなルートをたどってくるのか、付き添いの先生はいるのかなどなど、知っておかなくてはならないことはいくらでもある。

新協力者への説明と経験者との交流を企画して、神保町のオフィスを借り、夕方7時からミーティングを開くことにした。説明を聞いてホッとした顔つきになるのを見ると今年もうまくいきそうだ！という信が生まれてくる。交流会で事をしながらきちと具体的なアドバイスなどを受けて、新協力者は後輩たちを受け入れていくイメージをふくらませていった。

ただん勤務する会社などの会議でも、どうしても出席できない人は必ずいる。今回も出席できない人というの人にはメールや手紙を使ってできるだけ懇切に説明をしておくことも忘れてはならない。ありがたいのは、協力を申し出てくれた先輩たちはまず意識が高いこと。それから、組織の中でも存分に力を発揮している人であるから理解力がずぐれていることである。現代のメールというツールが有効、存分に手助けしてくれた。こうして準備は整った。今年の準備を始めて早くも7か月を経ている。

先輩の職場を訪問し説明を聞く延高生

準備万端

東京で待ち受ける準備は整った。しかし、生徒たちは学業が本務である。おそらく中間考査などのスケジュールがいっぱい詰まった毎日を送っているのであろう。隠勿を整えた先輩たちからは班の編成や生徒氏名などの問い合わせが次々と届く。

企業によっては受け入れのための総務関連部署への手続きを経なくてはならないところも出てくる。そのたびに学校と連絡を取り合って先輩にないでいく日々が続いていた。

ようやく、学校から校長名で各先輩に依頼状が届き、続いて5人～9人ほどの班でまとめられた生徒の氏名が送られてきて、修学旅行の初日12月9日（火）を待つこととなった。

生徒たちから温かいお礼状

無事に4回目の延岡高校「先輩訪問」は終わった。生徒たちは何を得て帰ってくれたか。先輩たちは母校に何を思ったか。思いつつ、新年のオフィスに顔を出すと、年末に出された延岡高校からの手紙が届いていた。

校長先生からのお礼状、そして、生徒一人ひとりが書いてくれた手紙。涙を浮かべたくなるような純真な中身に胸を熱くした先輩もあいことだろう。

手元にある2年5組代表者からの手紙の一部「……特に印象に残っているのは五ケ瀬川と天皇のつながりを、古事記をひもといていく話です。そのお話を聞いた瞬間に国語的に話すことの大切さ、そして、古文を学ぶ意味を悟ったました……」などというほめ言葉であろうか。

いつの日にか、今日会った後輩たちが、それに続くずっと後の延岡高校生のために何かをしてくれることを信じて、私たちは、また東京で頑張っていこう。

（黒木重昭さんは、出版社「小学館」を退職後、現在、認定NPO「ふるさと回帰支援センター」勤務）

修学旅行でキャリア教育

東京の先輩28人の職場へ

いよいよ当日！

「こんにちは！」元気あいさつとともに9人の男子生徒が訪ねてきた。きちんと学生服を着て、がっちりとした体つきの生徒たち。制服のボタンを見ると延岡高校の校章が金色に光っている。先輩としては懐かしさのこみ上げる瞬間である。生徒たちの座る席に北海道美瑛町のアンテナショップで買ってきておいた「アンパン」とペットボトルの茶を準備しておいた。

「よく来たね！このアンパンは昨年来た人たちも、おいしいと言ってたべてくれたよ、どうぞ！信じられないくらい鮎あん」のいっぱい詰まった美瑛町のアンパンを食べて生徒たちはリラックスしていく。

修学旅行の初日、まだ緊張と興奮が収まらないうちに初めて接する年齢の高いおじさん先輩だ。きっと戸惑っているに違いない。自己紹介をして生徒たちにも自身の出身中学や部活、進路の目標などを述べてもらいながら次第に話を深めていくことにしていった。大事なことは話が「方的にならずに会話をすることである。

モータープールで待つバスに午後4時50分までに戻してやらなくてはならないから、あれもこれも話したいことは山ほどあるが、自分自身が経てきた大学進学のこと、つまずいたときの悩み、悔恨、そして大学で得た友人たちとの生活、就職して得た喜び、そして今の自分がどこに向かおうとしているのか、などを選びぬいて語って聞かせた。生徒たちの目の輝きがとても嬉しい。

職場訪問を終えてみんなで記念撮影

銀座の街を歩く

話し終わって少し街歩きをすることにした。なんといっても世界で最もきらびやかな銀座の街である。ただ、銀座を見るときに、ただ派手やかな街を見るだけではつまらない。道を行く人たちの言葉に耳を澄ませない、街を行く人の半数は外国の人たちだ、日本はますますグローバル化されていく。そうした社会に果立っていく君たちは英語をはじめとして「言語」の力をつけておくことがとても大事になっていくからね！というのが街歩きのアドバイスであった。

街歩きも終わった。いよいよ生徒たちを上野に向かって帰さなくてはならない時間が迫ってくる。地下鉄銀座駅まで送り、切符を買うのを見守って、9人は手を振りながら去っていった。わずかな時間余りしか接していないのに寂しさがこみ上げてくるのは、なぜだろう。

生徒たちはちゃんと上野にたどり着いたかな？心配で携帯電話してみた。「元気に、戻ってきています！」という声を聞いて安心。

しばらくすると、各先輩たちからも「後輩たちが無事戻っていきました」かわいかった！職場のみんなが、延岡高校って素晴らしいと言ってくれた」「延岡高校生はみんな礼儀正しいですね。職場で言われてうれしい」などという報告が続々とオフィスのパソコンに送られてくる。無事に送り返したかどうか、一報を入れてほしいと頼んでおいた協力の先輩たちからの報告で、ある。ここにも、後輩を思う先輩たちの気持ちがあふれていた。

読者文芸

短歌

延岡短歌会　（延岡市）

空襲を務めの一念で食い止めし古家守りて日々有り難し　太田兼代子
老いしな心静かに過ごし度し朝食の相手に新聞ひらく　村上　孝
折をりに季節の花を持ちくるる友ありて嬉しと今日は菜陽花　山本　幸子
四季咲きの薔薇のつぼみに虫の付き哀れ幾つも花は開かず
盛りすぎ色の褪せたる紫陽花にほつりほつりと雨が降る　松崎美子
群生のしおんの花に励められて五十瀬の川の景真白き
先の日庭にドリ来て凌霄が蕾の三翌ク日もおりくる　甲斐　昌子
今日もく健保するがに庭に来て雀鳴きつつ餌をほしがる
旅の朝ひ会きつかいの会見の雨降ったいと祈る心で　甲斐　厚子
久びさの博多の街は人の波ほオオンに惹かれて歩む　村上るよ
辻馬車に湯布院盆地観光す晴の音癒されながら
梅雨時時色とりどりの傘の道もにぎやか雨降きになる　甲斐　厚子
肉見れば会て欲しい魚見れば買って欲しいなが話し
夢ちのひとり二人と減る中にペラン新人の入会願もし　黒木　茂子
庭一面の黄とこの日も小さき花は満開に咲く
赤点滴と庭一面に咲き盛るハさき花を明に見る　山本美智江
かいつぶす今年も真紅の花つけてあい行く合をはげましつる
横書きの文章がなかなか読めつつ定木を全て視る昭和だたち

俳句

もみじの里俳句会　（延岡市）

寒狩り二人をつれつる明り　栗栖　寛
紫陽花や色白美人のつ化粧
蚊に刺され払えない身のもどかしく　藤崎久子
慣れ始手で差刈るキミの光る洋
修繕と車窓から見る棚のほり　中野　伸行
ノスタルジ昭和の夏の浜辺かな
宇宙より美麗の雑選月晴れ　甲斐ユリ子
七夕や遠いた気持ちまるるす
梅雨眼中カエル生きき我れ浮ネ　甲斐　昭子
雨舞台鮮やかに舞う義かな　杉野　秀樹
島除けの網の中なる柑橘塊る
梅雨寒や鵜鳴きつつ巣に帰る　赤藤　忠

麦の芽俳句会　（延岡市）

竹筒のみどり輝しき水至薬　小林千恵子
路地深ければ紫陽花の彩深し
月下美人見せたき兄は天国に　秋田　公江
身ほどに薩摩いろいろ鹿の忌
卯の花に風のやさしき社門　榎本　和江
何ごともふたつ返事や雨蛙
緑陰へナ全国手献車　甲斐ミヤ子
得忌に軟弱あかり長蘇畑
梅雨の音粉挙すこ脱の上　黒木　卓子
田国美と手面美しき雲の峰
窓明けて滝に おろく山の宿　佐藤　延子
単衣着て三十人の大合唱
梅雨晴間我家梅抜四メートル　眞鍋　サ子
観測ツアー行く先々の栗の花
恭こぶひとり占める農夫魚呂
帰路にてひと目見ぬ間の青田かな　矢野美智子
吉野の秘蔵の花敬る名所古の上　吉田　弘子
大分焼桃山丘陵真向ひに

読者文芸